様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０９８２

研究課題名（和文）タイ北部、ユーミエンの文化復興運動と民俗知識の再編に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Cultural Revival Movements and the Reformation of Folk Knowledge of the Iu Mien in Northern Thailand.

研究代表者
吉野　晃（Yoshino, Akira）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：６０２３０７８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：　タイ北部の山地民族ユーミエンの文化復興運動は1990年代に始まり、当初は漢字教習や伝統文化の教習、伝統文化のメディア化に重点が置かれた「教習型」の運動が盛んであった。しかし、2010年代に入ると教習型の運動が少なくなり、コンサートや運動会などの「イベント型」の運動が増えてきた。その一つとして、女性が儀礼に参入する形の新しい宗教現象が生じている。この文化復興運動の変化の一つの要因は、社会文化の流動化の加速に対応した民俗知識の再編成であった。

研究成果の概要（英文）：　The Iu Mien cultural revival movements began in the 1990's. At the first phase, “teaching”style projects, such as teaching Chinese letters and Mien traditional culture, were frequently conducted. In the 2010's, the teaching style movements decreased and “event” style ones, such as concert and sports festival, increased. The latter includes a new religious phenomenon in which women come to take part in rituals. A factor of this shift of movements is the restructuring of their folk knowledge caused by the acceleration of socio-cultural mobility.

研究分野：社会人類学

キーワード：ユーミエン　ヤオ　文化復興運動　民俗知識　教習型　イベント型　新しい宗教現象　タイ

１．研究開始当初の背景

本研究でいう「文化復興運動」は、当事者たちが称している名称ではなく、タイ北部のユーミエン社会に起きている、「伝統文化」の維持と次世代への伝承を組織的に行おうとする動きの総体に対して筆者が概念化した用語である。ユーミエン(Iu Mien, 他称ヤオ)はタイの山地に居住するマイノリティであり、焼畑移動耕作民であったが、近年では常畑化と定住化が進み、出稼ぎが増加するなど大きな社会文化変化が生じている。

グローバル化に対するマイノリティの抵抗運動として、タイのユーミエン社会では 1990 年代に入って文化復興運動の動きが顕在化した。文化のタイ化や、生業の転換、人口の都市への流出等によって、ユーミエンの文化伝承が危殆に瀕しているとの認識がユーミエン社会に広がった。そこでタイ北部の広域に亘る村落の主立った者が会議を組織し、タイ山地民教育文化支援の NGO と提携して、ユーミエン文化を次世代に伝承するためのプロジェクトを立ち上げ、多数の村において漢字教習会が施行された。更には、ユーミエン文化に関する各種メディアも発行された。伝統文化教習のセミナーも開かれ、ユーミエン独自のスポーツ祭典や音楽祭なども毎年開催されている。

こうした一連の文化復興運動について、筆者は 1990 年代の早い時期から調査し、概況を報告分析してきた。しかし、運動の経緯・活動の概略についての記述・分析にとどまっており、運動の成立要因、運動の中で展開される知識の再編成、運動のイデオロギー、運動の多様化に関するデータと分析は不十分であった。そのため、この調査計画を立てた。

２．研究の目的

この研究では、次の三つのことを目標とした。
1)タイにおけるユーミエンの文化復興運動における NGO や村落等の運動を担う組織間の関係と運動が成立している要因を明らかにする。
2)文化復興運動の過程で生じているユーミエンの民俗知識再編成の内容を具体的に把握し、その変化の方向と要因を明らかにする。
3)ユーミエンの民俗知識の変化の一部としての文化復興運動の位置づけを明らかにし、マイノリティの文化消滅の危機に対する抵抗の一つの型を示す。これらの作業を通じて、マイノリティ研究に資することを大きな目的とした。

３．研究の方法

研究の方法は、インタビュー調査を主として、参与観察を併せて用いた。イベント、儀礼の調査は、参与観察により、映像記録を行った。

インタビューはユーミエン･ネットワーク役員、NGO 職員、イベント関係者、ユーミエン村落の祭司・住民等に対して行い、スポーツ祭典、音楽会等のイベントや儀礼については参与観察とともに、ビデオに催し物・儀礼の過程を収録し、分析した。また、発行物については、可能な限り購入収集した。

これらの調査で得られた資料によって、文化復興運動が展開する過程を再構成した。

４．研究成果

これまで明らかになったことは概略以下の通りである。(1)全国組織ユーミエン・ネットワークの運営する漢字教習やイベント等の実践と、個々の村・組織等で企画実行された同様の実践が多数あり、それらが緩やかな連携を持って運動を形成している。(2)文化復興運動の実践には、漢字教習・伝統文化セミナーなどの「教習型」実践と、ユーミエンのスポーツ文化祭・ユーミエン音楽祭などの「イベント型」実践との二つの類型があり、2010 年代に入ると、「教習型」実践が衰え、「イベント型」実践が盛んになってきた。(3)「イベント型」に類する実践として、儀礼知識の再編によって、廟建設・女性シャマン出現・新型儀礼形式の特徴をもつ新たな宗教現象が生じている。(4) 伝統的儀礼的知識の後継者養成に難がある一方、民俗知識のスタンダード化が進んでいる。さらに、下に述べる新たな宗教現象においては、伝統的な儀礼知識の再編成が行われている。(5)社会文化変化に伴って民俗知識に大幅な再編が生じており、それに応じて運動も多様な方向に展開している。

(1)文化復興運動の組織　文化復興運動は、自文化消滅を危惧するマイノリティとしての危機感を基盤として、ユーミエンの文化を振興し民族アイデンティティを強化する方向の多様な実践のゆるやかな連携で成り立っている。自文化の消滅に対する危機感から、タイ北部の広域に亘る村落の主立った者がユーミエン会議(Chomrom Iw Mian)を組織し、タイ山地民の教育文化を支援する NGO、IMPECT(Inter Mountain Peoples Education and Culture in Thailand Association)と提携して、ユーミエン文化を次世代に伝承するためのカリキュラム作成と、文化を伝承させるためのプロジェクトを立ち上げた。その結果として、ユーミエンの儀礼に必要な「漢字」を教える漢字教習プロジェクトができ、漢字教習のためのテキストが編纂され、多数の村において漢字教習会が施行された。ユーミエン会議は 1992 年にユーミエン・ネットワーク(Khrueakhaay Iw Mian)となり、IMPECT と協力して教習会を催すほか、口承史、儀礼、歌謡などの CD、VCD、VHS や、伝統文化に関する図書を発行してきた。漢字教習・伝統文化教習のセミナーも多く開かれ、ユーミエン独自の文化・スポーツ祭典も毎年開催されてきた。

また、こうした組織とは別に、漢字教習を独自に行う村落もある。当初想定したとおり、この文化復興運動はユーミエン・ネットワークだけでなく、ユーミエンに共通した危機感

を背景として、ネットワークの活動に直接関わらない村の村民も関わっている広範な運動であることが確認された。

但し、ユーミエン・ネットワークの活動が、独自に教習等を行っている村落の活動に多少なりとも影響を及ぼしており、ネットワークが文化復興運動の中心的組織であることも確かである。村落独自の活動にも、ユーミエン・ネットワーク役員が個人として参与している事例や、独自に企画されたイベントにユーミエン・ネットワークの代表が来賓として招聘された事例もあった。独自に漢字講習を行ったパヤオ県の PY 村では、ユーミエン・ネットワークや IMPECT からの支援を得ることなく村の資金で漢字教習会を過去 2 回、祭司知識の講習会を 1 回開いたが、漢字教習では、ユーミエン・ネットワークの編集したテキストを使用している。このように、組織としてはユーミエン・ネットワークを中心としながら、その影響を受け、或いはその発行物を利用するなどのかかわりを保って、その他の村落が独自の活動を展開しているのである。

(2) ユーミエンの文化復興運動の実践には、漢字教習や伝統文化セミナー、そのための教科書の編集発行などの「教習型」実践と、定期的に開催される「ユーミエンのスポーツ文化祭」や「ユーミエン音楽祭」といった「イベント型」実践との二つの類型があることを見いだした。

①「教習型」の実践は 1990 年代前半に始まり、2000 年代を最盛期として、2010 年代に入ると衰えてきた。これは、2000 年代には IMPECT が国家文化委員会からの資金援助を受けて漢字教習や伝統文化セミナーなどを実行できたが、2000 年代半ばにその支援が終わり、資金難となったことも影響している。ユーミエン・ネットワーク独自の資金は十分ではなく、ユーミエン・ネットワークと INPECT が主催する教習会は 2010 年代にはなくなった。但し、村落によっては独自に教習会を行っている所もあり、教習会そのものが無くなったわけではない。

また、ユーミエン・ネットワークと IMPECT の共催で、ユーミエン伝統文化セミナーも別途開かれていた。1999 年に始まり、2009 年まで続いた。青少年にユーミエンの伝統文化を教えるセミナーで、当初は合宿形式であったが、後に講演会の形になった。しかし、2010 年代には行われなくなった。

これらの教習会とセミナーに対応して、様々な教材メディアも 1990 年代から 2000 年代に発行された。漢字教習のテキスト 5 冊、儀礼経文 1 冊、伝統文化セミナー用テキスト 2 冊、歌と口承史の CD 2 枚、儀礼の VCD(VHS) 1 枚などが 2000 年～2005 年に立て続けに出ている。これはユーミエン・ネットワークの協力を得て、INPECT から発行された。

②一方、「イベント型」の実践は、2010 年代に入ってより盛んになりつつある。2001 年に、チエンマイ県のユーミエン村落で開かれていたユーミエン複数村落の合同運動会を全国規模の催しとし(Jonsson 2005:119)、以来会場となる村を替えて催されてきた。正式名称は、「ユーミエンの文化とスポーツの祭典」(以下、スポーツ祭典)という。その大半はサッカー、バレーボールなどのスポーツ競技であるが、書字コンテストやコンサートも行われる。その後参加村落が増え、毎年 3 月に 2013 年まで盛大に開かれてきた。規模が大きくなりすぎた為、2014 年と 2015 年には主催引き受け手を決めるに難航し、中断しているが、今後も継続の予定であるという。このイベントは村落単位でチームを作り参加する。

ユーミエン・ネットワークが直接関与しないイベントとして、音楽祭「世界ユーミエン祭典」がある。これは、2010 年にチエンラーイ県の HNY 村のユーミエンが中心となって始められた。毎年 4 月 18 日(タイの水かけ祭りソンクラーンの直後)にチエンラーイ県のチエンセーン市で開かれている。この日は、タイ国内のユーミエンが集うだけでなく、チエンセーンのメコン河対岸のラオスからも多数のユーミエンが参加し、路上で即席の市が立つ。このイベントは、当初よりユーミエン・ネットワークが直接関わっていない。後にユーミエン・ネットワークの役員が来賓として参列することもあったが、組織として関与しているわけではなく、独立の民族イベントと言える。その後主催者が入れ替わるが、現在も継続されている。このイベントは、歌手を主催者が手配するが、観客は個人参加である。村に拘束されない形で広範な地域からユーミエンが集まってくる。

(3)その「イベント型」に類する現象で、2010 年代以降顕著になってきたのが、従来にない儀礼形式を呈する新しい宗教現象である。

新たな宗教現象(以下、新宗教現象)は、(A)固定的祭祀施設＝廟の建設、(B)シャマンあるいはシャマン祭司としての女性の儀礼への参入、(C)歌唱による儀礼執行という３つの特徴をもつ。（A）もさりながら、特に(B)女性シャマンの登場と(C)歌唱による儀礼執行は、タイ北部のユーミエンの儀礼には見られなかった全く新しい現象であり、既存の儀礼知識を再編して新しい形式を創り上げ、ユーミエンの文化として表出している。この点で、文化復興運動の新たな局面であるとともに、民俗知識の再編の新たな展開である。この現象が顕著に表れているのはチエンラーイ県東部の HCP 村であるが、廟の建設（および建設計画）も、女性がシャマンとなり儀礼を行う現象も、それぞれ他の複数の村において見られる。HCP 村では月に二回、もう一つの HCL 村(チエンラーイ県)では月に一回、廟で儀礼を行い、村の内外から多くの信者が集

まり、祭典の様相を呈する。また、ナーン県の LBY 村では不定期に儀礼が行われる。このように、新宗教現象は一つの村の現象ではなく複数の村に発生し、タイ北部の西端のチエンラーイ県から東端のナーン県まで広く分布しており、廟や女性祭祀者を訪れる信者も含めればかなり広範囲に亘る現象である。また、複数の村でユーミエン・ネットワークの役員が廟建設や新たな儀礼に関わっており、組織面でも従来の文化復興運動とつながりを持って展開されている。

HCP 村の廟における儀礼と、従来の儀礼との比較を表に示した。ここで重要なのは、男性が独占してきた儀礼執行の役割に女性が参与するようになったことである。従来のユーミエンの大半の儀礼は男性祭司が漢字経文を読誦・暗誦して執行し、少数のシャマン儀礼を行うシャマンも男性のみであったが、新宗教現象では女性が歌によって儀礼を執行している。

表 1 従来の儀礼と〈廟〉における儀礼

	祭司が執行する従来の儀礼	HCP の〈廟〉における儀礼
儀礼執行者	男性祭司	女性シャマン(圧倒的多数) 男性祭司(降神して司祭)
降神	しない	する
儀礼執行者	祭司	シャマン シャマン祭)
唱え言	経文(テキストあり)読誦 漢字知識が必要	歌(テキストなし) 漢字知識は必ずしも必要なし
言語	儀礼語(「広東語」) 漢語雲南方言 ミエン口語	歌謡語(文語) ミエン口語
祭神	〈大堂画〉の神々(道教) 〈玉帝〉 経文に登場する神々 祖先　師父 盤王・唐王（像なし）	老君 郎老 伏羲姉妹 七姐 太白先生 口承伝承における神々(経文には登場しない) 盤王・唐王（像あり）

(4)ユーミエンの民俗知識総体の動向を見ると、従来の儀礼的知識は、祭司後継者が極端に減少していることから衰退化の傾向は否めない。祭司は男子に限られるが、儀礼知識を蓄積して祭司となる男性がきわめて少なくなっているのが現状である。2014 年時点で 60 歳代以上の世代には従来の儀礼知識は保持されているが、世代を下るにつれて急速に保持されなくなっている。これにはタイの公教育の普及と、出稼ぎなどの人口流動化が大きな要因となっている。

これに対応し、伝統文化保持のために幾つかのテキストが編纂された(上記(2)①)。この過程では、多様なヴァージョンをもっていた写本の儀礼テキストが、特定の１テキストに収斂され、忘却されるスタンダード化が必然的に伴っていた。

一方で、セミナーテキスト、イベントや新宗教現象においては、従来の文化を再編して新しい解釈と形を与え、新たな運動に利用している現象もみられた。セミナーのテキストでは知る人の少なかった神話が新たな意味を加えられてテキスト化された。スポーツ祭典では、余り知られていなかった文書がエスニックシンボルとして表示された。また、新宗教現象においては、女性が儀礼を執行する新たな形に相応して、従来の儀礼知識を再解釈再編して活用している。

(5)このように、ユーミエンの文化復興運動は、グローバル化及びそれ以前からのタイ国民化に伴う社会文化変化によって自文化が消滅するのではないかとの危惧を基盤に持ち、ユーミエン・ネットワークという中心的な組織がありながら、それだけに限定されない自発的な動きも伴った運動である。教習型からイベント型へ運動の内容は変化し、さらには新宗教現象が発生するに到っている。これはグローバル化とタイ国民化の動向が強まることに対して、ユーミエン社会が民俗知識を再編して示した抵抗の一形態ととらえることができる。

参照文献　Jonsson, H. *Mien Relations: Mountain Peopls and State Control in Thailand.* Cornell University Press (Ithaca), 2005.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①吉野晃, 廟と女性シャマン―タイ北部、ユーミエン(ヤオ)の新たな宗教現象に関する調査の中間報告―, 東京学芸大学紀要　人文社会科学系□, 査読無, 64, 2013, pp.115 -123. http://hdl.handle.net/2309/132467

②吉野晃,「ユーミエンにおける〈家先〉祭祀―タイと藍山県との〈家先単〉の比較―」『瑶族文化研究所通訊(神奈川大学ヤオ族文化研究所), 査読無, 第 4 号, 2013, pp.82-87. http://www.yaoken.org/study/kaken-result.html

③吉野晃,〈掛三台燈〉の構造と変差―タイ、ラオス、中国湖南省藍山県のユーミエンにおける〈掛燈〉の比較研究―, 瑶族文化研究所通訊(神奈川大学瑶族文化研究所), 査読無, 第 3 号, 2011, pp.35-40. http://www.yaoken.org/study/kaken-result.html

〔学会発表〕（計６件）

①吉野晃,〈歌〉の詠唱法と儀礼への応用―タイ北部、ユーミエン(ヤオ)社会における新たな宗教現象に関する中間報告 3―, 日本文化人類学会第 49 回研究大会, 国際交流センター(大阪), 2015 年 5 月 30 日.

②吉野晃，2014「固定的祭祀施設・女性シャマン・文化復興運動―タイ北部、ユーミエン(ヤオ)社会における新たな宗教現象に関する中間報告 2―，日本文化人類学会第 48 回研究大会，幕張メッセ国際会議場(幕張市)，2014 年 5 月 17 日.

③Akira Yoshino, From Patrilineal Joint Families towards Nuclear Families: The Change of Household Structure in the Iu Mien (Yao) Society in Northern Thailand, International Conference: Thai Studies through the East Wind, Chiang Mai(Thailand), 2013 年 8 月 24 日.

④吉野晃，廟の建設と女性祭祀者の出現―タイ北部，ユーミエン社会における新しい宗教現象―,日本タイ学会第 15 回研究大会，横浜市立大学(横浜市)，2013 年 7 月 7 日.

⑤吉野晃，女性シャマンと歌―タイ北部，ユーミエン(ヤオ)社会における新たな宗教現象に関する中間報告―，日本文化人類学会第 47 回研究大会，慶応義塾大学(東京)，2013 年 6 月 8 日.

⑥吉野晃，ユーミエンにおける〈家先〉祭祀―タイと藍山県との〈家先単〉の比較―，第二届国際瑶族伝統文化研討会―資源与創意―(湖南省文学芸術界聯合会・神奈川大学瑶族文化研究所共催)、長沙(中国)，2012 年 8 月 28 日.

〔図書〕(計 13 件)

①吉野晃，他(長谷川清・林行夫編)，京都大学地域研究統合情報センター，積徳行と社会文化動態に関する地域間比較研究―東アジア・大陸東南アジア地域を対象として―(CIAS Discussion Paper No.46)，2015，131(97-103)

②吉野晃，他(神奈川大学国際常民文化研究機構編),神奈川大学国際常民文化研究機構，アジア祭祀芸能の比較研究(国際常民文化研究叢書第 7 巻)，2014，424(141-155).

③吉野晃，他(クリスチャン・ダニエルズ編)，言叢社，東南アジア大陸部　山地民の歴史と文化(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所歴史・民俗叢書Ⅸ)，2014，349(219-246).

④吉野晃，他(武内房司・塚田誠之編)，風響社，中国の民族文化資源―南部地域の分析から―，2014，432(63-90).

⑤吉野晃，他(信田敏宏・小池誠編),風響社，生をつなぐ家―親族研究の新たな地平―，2013，338(153-175).

⑥吉野晃，他(兼重努・林行夫編)，京都大学地域研究統合情報センター，功徳の概念と積徳行の地域間比較研究，2013，111(102-111).

⑦吉野晃，他(国際常民文化研究機構編)，国際常民文化研究機構・神奈川大学常民文化研究所，国際シンポジウム報告書Ⅲ “カラダ”が語る人類文化―形質から文化まで―，2012，172(141-147).

６．研究組織

(1)研究代表者

吉野　晃（YOSHINO，Akira）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：60230786